

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

人間は、知覚、記憶、思考の各過程の組合せの結果としてある種の判断を下すのだが、その一連の認知行為の中で各過程のエラーが積み重なり強め合って知らぬ間に判断エラーをしてしまうことになる。

人はある事象を見たとき必ず何らかの信念（例えば、B型の血液の人間は二面性がある）を持ち、その信念に沿って「こんなことが起こるだろう」と予期し（彼はB型だから矛盾した行動をとるだろう）、結果を見たとき予期に合致するよう

I

しようとする傾向がある（矛盾した行動のみを記憶する）。その結果、予期していた通りのことが起こったとしか見ないから信念がいつそう強められる。つまり、信念→予期→予期を強化するよう結果を解釈→いつそう強い信念となる、というプロセスのフィードバックがはたらき、ますます頑固に信じるようになるのだ。

この場合、「こんなことが起こるだろう」と予期する段階において「こんなことは起こりえないだろう」とはいっさい思わず、また結果を見たとき予期に反する事実は無視してしまう傾向がある。

また、予期に沿った情報は記憶しやすいが、

II

には注意がいかないこともある。例えば、女性ド

ライバーは運転が下手だという信念の持ち主は、そのような目で常にドライバーを見ており、実際に下手な女性ドライバーを目撃すると信念をいっそう強める。運転が上手な女性ドライバーがもつと多くいても記憶に残らず無視してしまうのだ。

イ

このプラスのフィードバックによって、^A予期が結果を決めるだけでなく、予期したことが実現してしまうという逆転した状況も生まれかねない。

先生が「この子はできが悪い」と思い込む（予期してしまう）と、どのような行動もできの悪さに結びつける。そのため、ますますできが悪いという解釈が積み重なり、（せつかく本人が努力していても目に入らず）結局その子どもは「落ちこぼれ」になってしまう。この場合、先生の予期が原因となった落ちこぼれだから、実は「落ちこぼれ」なのである。□

もう一つの判断エラーは、サンプルの数が多いと平均的な値に近づく（これを数学で「大数の法則」という）が、サンプルの数が少ないと平均からのズレが大きいのが普通であるのに、それがあたたかも平均であるかのように誤認してしまうというケースである。「あの医者
は名医だ」という噂があり、事実多くの患者がそう言う場合は信用できる。ところが、「あの医者にかかると女の子が

多く生まれる」という噂となると怪しいのだ。 ハ

それと似たこと^Bで「平均への回帰」という現象がある。ある生徒の学校のテストの成績は上下するのがつきものだが、何回かで平均するとある一定のレベルになるのが普通である。各回のテスト結果は平均の力プラス誤差として出るのがだが、誤差は体調や集中度や寝不足などによって良かったり悪かったりと変化するから、成績は平均点の上下を変動する。しかし、何回もテストをすれば平均に回帰するものである。だから、一回ごとの成績に一喜一憂することなく、自分の平均はこの程度だと見定められればいいのである。普段はいい成績を取っているのに、あるとき（誤差で）悪い成績を取ってしまった、自暴自棄になってしまふということがある。少数のサンプルだけで判断すると誤る例である。 二

野球で「二年目のジンクス」ということがよく言われる。一年目は好成績を残したのに、二年目はさっぱりダメという場合である。イチローのような特段に優れた選手は例外で、ほとんどが並の実力の持ち主だから、一年目は誤差でたまたまいい成績となっただけで、二年目からは平均に戻ったと考えた方が正しいだろう。にもかかわらず、スウィングが悪い、モーションが悪いと指摘され、

自分もそうではないかと思ひ込んでフォームを崩してしまい、結局大成しなかった選手が多くいる。
ホ 数年間を見て実力を見極める度量が欲しいものである。

以上、判断の各過程におけるエラーについて述べてきたが、それらに共通する心理を整理しておこう。

まず、「認知的節約の原理」がある。限られた情報から欠けた部分を経験や先入観や単純な a によって補い、効率よく事態を処理しようとする心理のことだ。本人にとって負担が少ない思考法だが、そこにエラーが生じてしまうのだ。

続いて、「認知的保守性の原理」を挙げよう。すでに持っているスキーマを保ち維持しようとする傾向で、反証を無視したり、無理にでも自分の描像に合わせてしまう心理である。自分は一貫した考え方をしていると自認できるので III が得られることになる。だからこそ間違いやすいとも言える。C 自分が安心できる思考法でつい安住してしまうからだ。

もう一つは、「主観的確証の原理」で、どちらともつかない証拠だけでなく明らかな反証であっても、自分の予期を積極的に支持していると勝手に解釈する心理傾向である。「いやよいやよも好

きのうち」と身勝手に思い込んでセクシユアルハ
ラスメントに及ぶ人間がその典型と言える。自分
の身勝手さに気づかず、全て他人のせいにして安
閑としている人にお目にかかることが多いのはこ
のためだろう。被害者に対して状況証拠しか見つ
かっていないのに犯人と決めつけ、すべてその

bの下で解釈したがる例もある。犯人が見つか
っていないと不安だが、強引にでも決めつけてし
まえば安心するのだ。（早く安心したいという気
持が底に潜んでいることもある。）この心理には、
思考の経済性や一貫性なども絡み合っている。こ
うなるともはや c する気持を失ってしまう。

さらに付け加えるとすれば、「偶然性を拒否し
たい心理」、言い換えれば「確固とした因果関係
として説明したい心理」もある。偶然に起こった
ことであっても必然だと思ひ込み、それをきちん
とした因果関係で説明しようとする科学的な理
由が見つからず、ついに超常的現象だと考えてし
まうケースである。予知夢がテレパシーしかない
と解釈し、たまたま当たったのを透視できたと思
ひ取り、そのまま信じ込んでしまうのだ。認知的
エラーを自覚しない人ほど、自分の体験を絶対化
して信じ込む傾向が強い。「しよせん、体験した
ことがない人にはわからない」として、他人の意

見や忠告を受け入れなくなってしまうのだ。そして、自分の意見を強調すればするほどその信念はいつそう強くなっていき、もはや後戻りが不可能になる。

むろん、人間の認知エラーが多いと言っても、私たちは日常生活において大きな支障なしに生きている。それを無意識のうちに矯正したり、また大きな問題が起こらないので気づかないままやり過ごしている。ときには認知エラーが人間の生存にプラスにはたらいていることもあると知っておくべきだろう。あまりに気にし過ぎると神経症を病むことになりかねないからだ。

ただ、突発的な事件が起こって即座の判断を迫られたり、すぐに合理的な解釈ができない事象に遭遇したりしたとき、IVが肝腎なのである。それは疑似科学に騙だまされていないか自らを点検することにも通じるからだ。

(池内了『疑似科学入門』による)

問一 次の文章は、本文中に入るべきものである。も
つとも適当な箇所を の中から選べ。

そのようなケースが世の中には多いのではないだ
ろうか。「要領の悪い部下」「下手な野球選手」
などゴマンとありそうである。

問二 空欄ⅠとⅢに入るもつとも適当な語句を、それぞれ次の中から選べ。

I

- イ 結果を提示
- ロ 安易に解釈
- ハ 選択的に解釈
- ニ 結論的に提示

II

- イ 反証となる情報
- ロ 信念にあらう事実
- ハ 予期された事実
- ニ 結論となる情報

III

- イ 認知的な独自性
- ロ 心理的な安定感
- ハ 人間的な信頼感
- ニ 保守的な確実性

問三 空欄 に入るもつとも適当な語を、
それぞれ次の中から選べ。(同じ記号を二度以上用
いてはならない)。

イ 状況

ロ 仮定

ハ 解釈

ニ 類推

ホ 自省

ヘ 自認

問四 傍線部Aの「予期が結果を決めるだけでなく、予期したことが実現してしまうという逆転した状況」は、筆者のいうどのような原理または心理からの判断エラーによって生まれやすいか。本文中の次の語句の中からもっとも適当なものを選べ。

イ 「認知的節約の原理」

ロ 「認知的保守性の原理」

ハ 「主観的確証の原理」

ニ 「偶然性を拒否したい心理」

問五 傍線部B「平均への回帰」という現象」は、
どのような判断エラーを回避する上で有効か。次の
中からもっとも適当なものを選べ。

イ 誤差のあることを認識しながらも特定の事例を重視して判断すること。

ロ 偶然的に生じた結果を問題にしすぎて判断してしまふこと。

ハ 誤差の生ずる確率をできるだけ低めに予測して判断すること。

ニ 少数のサンプルから簡単に判断して結論を出してしまふこと。

問六 傍線部Cで、「自分が安心できる思考法でつい安住してしまう」ために判断エラーが生じやすいと言っているが、そのような人の「思考法」の特色はどのようなものか。次の中から適合しないものをつ選べ。

イ 自分の仮説を絶対化して信じ込む。

ロ 偶然起こったことを必然と思い込む。

ハ 他人の意見や忠告を受け入れる。

ニ 自分の体験を重視し強い信念を持つ。

問七 傍線部Dのような人は、人の性格や行動を示す次の語のどれと無縁であると見ることができるか。もつとも適当なものを選べ。

イ 頑固

ロ 無視

ハ 度量

ニ 勝手

ホ 透視

問八 空欄□IV□に入るべきもつとも適当なものを次の中から選べ。

イ 認知的過程には誤りが多いことを自覚して、自分の推論を絶対化しないこと

ロ 人間の行動には必ずしも合理性がないから、無理にも合理化した説明を受け入れること

ハ 判断エラーは認知の各過程で生じるのだから、その各過程を分析し再確認すること

ニ 合理的な解釈は常に類推による非合理的なものを持ちエラーを含むことを自覚すること

ホ 自分の推論を相対化しては合理的に解釈ができないことを認識して判断すること